



メールマガジンに登録する

12月・1月合併号



クリスマスシーズンもいよいよクライマックスを迎えようとしています。街中を包むクリスマスの暖かな雰囲気癒されているのも束の間、一気に忘年会、大掃除、お正月の準備と慌しい年末を迎えることになってしまう方も多いのではないのでしょうか。



さて、12月・1月合併号となる今回のメールマガジンでは、当協議会の紹介「CIEE特集」で東京スタディーセンターと九州オフィスの特集を掲載しています。皆様のご協力のおかげでついに完成した2004年TOEFLスコア利用実態調査報告書のお知らせ・ご請求は「必見! 耳より情報」をご覧ください。今月上旬に東京・京都にて開催された次世代TOEFLテスト及び海外派遣プログラムに関する情報交換会(Uni-con)の報告も合わせてお伝えしています。毎回好評の連載「日本から発信する英語」・「言葉の玉手箱」も掲載中です。

来年も引き続きTOEFLメールマガジンをご愛読いただけますよう、よろしく願い申し上げます。それでは皆様、良い年末をお過ごしください。そして、よいお年を。

TOEFLは、エデュケーショナル・テスト・サービス (ETS) の登録商標です。

CIEE特集



CIEE紹介シリーズ:

CIEEスタディーセンター & 上智大学提携プログラム

～CIEE東京スタディーセンター ディレクター ジョイ(杏子)山村さんに聞く!～

CIEE紹介シリーズ:九州オフィスのページへ

今回は、CIEEスタディーセンターでディレクターを務めるジョイ(杏子)山村さんの登場です。彼女自身も日本・アメリカをはじめ、世界各国での豊富な国際経験をもつ”国際派”。そんな彼女に、「国際的な経験」と「外国語習得」の重要性について、またこれからの時代を担う若者達への期待について語っていただきました。

現状に満足することなく、常に前向きに新しい挑戦を重ねていく彼女だからこそ、メッセージにも説得力があります。彼女の素敵な笑顔は、仕事も趣味も思いっきり楽しんでいる証なのでしょう。(→[English](#))



ジョイ(杏子)山村
CIEEスタディーセンター 東京駐在ディレクター

” 両親は日本人ですが、
私自身は生まれも育ちもカリフォルニアです。 ”

CIEE (国際教育交換協議会)

1947年に教育を通じた国際交流を理念としてアメリカで設立された非営利団体です。本部はアメリカ北東部のメイン州ポートランドに置かれています。ヨーロッパ、アジア、オセアニアなど世界各地で教員、学生、社会人を対象にさまざまな国際交流プログラムを提供しています。

上智大学提携プログラムの内容

参加者全員がアメリカの大学に在籍中の大学生です。参加者は、上智大学市ヶ谷キャンパス比較文化学部でCIEEコア・コース(日本文化に関する特別コース)、日本語、その他の科目の計16単位を履修し、キャンパス周辺でホームステイをしながら日本の生活を体験します。学生が本プログラムに参加する一番の目的は、日本語会話能力の習得または向上です。参加者の日本語レベルはゼロから上級まで様々です。

CIEEスタディーセンター

出身大学

スタディーセンターはCIEEの中でインターナショナル・スタディー・プログラムと呼ばれる部門に属しています。インターナショナル・スタディー・プログラムでは米国の大学生のために世界各地の大学約60校で学べる留学プログラムを提供しています。東京のスタディーセンターは1982年にオープンし、当初は少人数で日本について学ぶセミナー形式のプログラムを開催していました。上智大学との提携プログラムは1998年の春にスタートし、現在までの東京のプログラムの参加者数総数は1000名を数えます。

ジョンズ・ホプキンス大学
パーデュ大学
コーネル大学
ノートルダム大学
ジョージ・ワシントン大学、
シラキュース大学
ヴァンダービルト大学
マカレスター大学
カリフォルニア州立大学 など全米各地の大学。

ホストファミリー募集中！

この何年間か、私たちのプログラムは着実に成長し、今度の春学期には、学生数は史上最高の80名となります。中には、学生寮を希望する者もありますが、大方の学生は引き続き、日本人家庭（ホームステイ）での生活を望んでいます。私たちプログラムの成功の大半は、何年も続けて学生たちをお世話して下さる日本の家庭（ホストファミリー）のみなさんのご親切とご好意のおかげです。

私たちは現在も、お世話をしていただける新しい家庭（ホストファミリー）を募集しています。ご興味のある方は、ぜひ[こちら](#)をご覧ください。



現在の仕事について

2003年にCIEEに勤務する前は、ボストンカレッジ大学にてインターナショナル・プログラム部門のアシスタント・ディレクターをしていました。その数年間の国際教育分野での経験をもとに、現在は若者たちが学問はもとより 日本文化や社会の体験をするにあたっての、よきガイド（案内人）としての仕事を楽しんでいます。世界は相互に依存している一方で、文化的には多種多様に異なっています。その中で適応し生きていくために、学生たちが国際理解を深めること、知識を吸収すること、如何にそれに対処するのかといった技術を身につけることを手助けする、というCIEEの使命と一致して、私は国際的な経験と外国語の習得の重要性を特に強調したいですね。



ディレクターをしていて考えること

私が担当する日本へのプログラムは世界中の学生と大学院生を対象としていますが、大部分の学生たちはアメリカから来ています。私たちの目的のひとつは、次世代のアメリカ人が国際的な考え方をできるようにすることです。経済的な競争にしる、政治的な関与にしる、また世界のいたるところでの開発援助にしても、それぞれの地域をよく理解していなければなりません。国際的にもアメリカの国の安全にも重要と思われる地域については、特にそのことが言えます。これを達成するには、私たちは世界中の言葉进行話さなくてはなりません。そして、直接的なイマージョンプログラム（学習中の言語を使う環境で生活しながらその言語を修得するプログラム）により、世界の問題や文化の専門的な知識を得る必要があります。そのような視点からも、東京駐在ディレクターとして私は学生たちが上智大学で学んでいる間に、日本語の上達だけでなく、世界の舞台で短期的にも長期的にも重要なリーダーシップの働きをしていただきたいと思います。常に願っています。

彼女の素顔

日本語も英語も堪能な彼女は、多彩な趣味も持っています。大学では、ボストン・カレッジで、経済学と音楽の学士号を取得、そしてロンドン・スクール・オブ・エコノミクスではパブリック・アドミニストレーション並びにパブリック・ポリシーの修士号を取得。彼女は流暢な英語・日本語のほかに、スペイン語、フランス語、イタリア語の基礎知識もあります。

もし彼女をテニスコートで見かけない時には、きっと他の趣味を楽しんでいることでしょう……。写真撮影とか、あるいはハーブシコードかピアノを弾いているかも……。または子どもたちにピアノを教えているかも。それとも新しい言語を学んでいるかも……。いや大好きな雑誌『ザ・エコノミスト』を読んでいるかもしれませんよ！

Joy Kyoko Yamamura, Resident Director, CIEE Study Center, Tokyo

Joy Kyoko Yamamura, born and raised in California by her Japanese parents, is the Resident Director of the CIEE study Center in Tokyo. Prior to joining CIEE in 2003, she worked as the Assistant Director of International Programs at Boston College. Having worked in the field of international education for several years, she enjoys guiding young adults to excel academically and to experience Japanese culture and society. In line with CIEE's mission to help people gain understanding, acquire knowledge, and develop skills for living in a globally interdependent and culturally diverse world, Joy reinforces the importance of international experiences and foreign language acquisition:

"Although open to both undergraduate and graduate students from all over the world, the majority of our students come from U.S. institutions. One of the challenges we face is to internationalize the thinking of the next generation of Americans. To compete economically, to be involved politically, to aid development efforts across the globe, we must have a greater understanding of regions, particularly those deemed critical to both international and U.S. national security. In order to accomplish this, we must speak the languages of the world, and gain expertise about the issues and cultures of the world through direct immersion. As the Resident Director in Tokyo, I hope to encourage our student participants to not only improve their Japanese language skills while pursuing their studies at Sophia University, but also to play a vital leadership role in the global arena, both in the short-term and long-term."

Joy earned her B.A. in Economics and Music from Boston College and her M.S. in Public Administration and Public Policy from the London School of Economics and Political Science (LSE). She is fluent in both English and Japanese, and has working knowledge of Spanish, French, and Italian. When she is not on a tennis court, you can find Joy pursuing her other hobbies-photography, playing the harpsichord and piano, teaching piano to children, learning new languages, and reading her favorite magazine, The Economist.

In recent years our program has grown steadily and this upcoming spring semester, we will have a record number of 80 students on our program. Although some students will choose to live in dormitories, an overwhelming number of students continue to prefer the Japanese homestay housing option. We attribute a great deal of our program's success to the generosity and goodwill of the Japanese families who have continued to host our students over the years.

We are currently recruiting new families.

[ページトップへ](#)

TOEFLは、エデュケーショナル・テスト・サービス (ETS) の登録商標です。

CIEE特集



CIEE紹介シリーズ:九州オフィス

CIEE紹介シリーズ:スタディーセンターのページへ



九州オフィスは、CIEE日本代表部・国内3番目の拠点として2002年10月に福岡市に開設され、広島・山口・九州7県・沖縄を担当エリアとして活動を行っています。

TOEFLテスト広報活動としては、一般からのお問合せ対応に加え、教育者向けTOEFLセミナーの開催、TOEFL-ITP (団体向けTOEFL) の実施計画・運営のサポート、学生・生徒向けTOEFLおよびプログ

ラム説明会、(財)福岡県国際交流センターこくさいひろばなどの

各地域の国際交流組織と共催による各種説明会等を実施しております。最近では、多くの大学・高校からも留学説明会等でのTOEFL説明会開催のご要望をいただくようになりこの場を借りてお礼申し上げます。

国際交流プログラムについても、海外語学研修の団体向けには委託事業・説明会・オリエンテーションの実施などCIEEならではの教育的観点からのサポートや、個人向けには、専任カウンセラーによる無料カウンセリングも行い、好評をいただいています。国際ボランティアプロジェクト(夏)・エコボランティア in オーストラリア(通年)等の海外ボランティアについても大学での説明会も年を追って開催ご要望が増え、加えて活水女子大学(長崎)においては、大学科目への採用等も始まり嬉しい悲鳴を上げております。また、高校生長期交換留学説明会(米・豪)も福岡・広島、沖縄にて開催いたしております。



まだまだ、広報活動が十分ではありませんが、今後も地域に密着した活動を皆様と共に実施して参りたいと考えております。ぜひ皆様からのご意見・ご要望をいただきますようお願いしております。まだお会いできていない方もたくさんいらっしゃいます。各地へ喜んでおじゃまいたしますので、どうぞ遠慮なくお声かけください。

【九州オフィス（福岡）】

九州オフィスでは、所長1名とカウンセラー2名が勤務しております。どうぞよろしくお願いたします。

所長： 西村 明夫
カウンセラー： 玉置 クリスティン 真由美、古川 知子

所在地： 〒810-0041
福岡県福岡市中央区大名2-4-38-808

電話： **ご来所の前に必ず下記までお電話でご連絡下さい。**
092-736-6740（祝日を除く月～金、9:30～17:30）



玉置カウンセラー



皆様も博多へお越しの折は
ぜひお声かけ下さい。
屋台で一杯やりながら、お話しませんか？



古川カウンセラー

【福岡情報】

福岡と言えば、博多山笠（祭り）、王監督率いる福岡ソフトバンクホークスもありますが、やっぱり、ラーメン、屋台、加えて玄界灘の海の幸、フグ、辛子明太子、そして焼酎・・・と、とにかくおいしい食べ物ばかりが思い浮かぶのではないかと思います。出張で来るCIEEスタッフも多いのですが、実は食べ物に釣られてきてるとか?!



[ページトップへ](#)

TOEFLは、エデュケーション・テスト・サービス (ETS) の登録商標です。

必見! 耳より情報



2004年 TOEFL® スコア利用実態調査報告書 完成!

1999年度、2001年度の改訂版となる2004年TOEFLスコア利用実態調査報告書がついに完成しました。この調査は国際教育交換協議会 (CIEE) 日本代表部 TOEFL事業部が2004年6月から9月にかけて全国の大学、法科大学院、都道府県教育委員会及び政令指定都市教育委員会を対象に行ったTOEFLテストの利用実態に関するアンケート結果をまとめたものです。

大学・法科大学院には、TOEFLスコアを入学試験・単位認定などへの利用を含め、どのようにご活用されているかを伺い、各教育委員会においては、英語教員採用選考時におけるTOEFLスコア保持者への判定・参考基準や優遇措置について伺いました。

ご多忙中にもかかわらず多くの関係者の皆様のご協力により、2004年の調査を終了いたしました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

同報告書をご希望の方は、[こちら](#)のフォームに必要事項をご記入のうえお申込み下さい。ご所属の団体宛に発送させていただきます。

なお、学生の方にはお届けできませんので、あらかじめご了承下さいますようお願いいたします。

[ページトップへ](#)

2004年度 Uni-Con実施報告

先頃、平成16年度「CIEE主催 次世代TOEFL®テスト及び海外派遣プログラムに関する情報交換会」(通称Uni-Con)を開催いたしました。本情報交換会は毎年12月に大学の国際交流部門のご担当者の方々にお集まりいただき、CIEEからの情報の提供と参加者相互の情報交換の場として実施しております。今年は従来の東京<12月8日(水)会場:東京ウィメンズプラザ>に加えて、京都<12月10日(金)会場:キャンパスプラザ京都>でも開催し、東京は過去最多の57名、京都も28名と、両会場共に大勢の方々のご参加されました。



情報交換会ではCIEEが「TOEFLテストの日本事務局」「世界規模の国際交流非営利団体」の2つの顔を持っていることから、今年度も「TOEFLテスト」「国際交流」の両テーマを設定しました。TOEFLテストに関する情報としては、新たにスピーキングが導入される次世代TOEFLテスト最新情報や、近年プレイスメントテストや国内大学院入試、教員採用試験など、留学以外の様々な目的で利用されているTOEFLスコアの活用事例についてご説明いたしました。また、国際交流に関する情報としては、今年度延べ659名が参加した国際ボランティア・プロジェクトの実施報告、新プログラム（エコ・ボランティア in オーストラリア）の紹介を行い、最後にCIEEが大学にご協力できることとしてTOEFL学内説明会・国際交流プログラム説明会の実施、語学研修のアウトソーシング、渡航前オリエンテーションについてご説明いたしました。

参加者からはどの説明にも高い関心が寄せられました。とりわけ新しくスピーキングが導入され学生の留学への影響が予想される次世代TOEFLテストの最新情報については関心が高く、熱心にメモを取る参加者の姿が多く見られました。また、語学研修のアウトソーシング、CIEEによる渡航前オリエンテーションの実施などにも多数の参加者から関心が寄せられ、TOEFLテストと同様にCIEEのアウトソーシング事業に対しても高い関心がうかがえました。

情報交換会の後には、CIEE事務所へ会場を移してささやかな懇親会を催しましたが、引続き懇親会にも多くの方々がご参加下さり、こちらも普段ではなかなかできない大学間での情報交換・ネットワークングの場としていよいよ定着してきたようです。



本情報交換会は、来年も「TOEFLテスト」「国際交流」をテーマに12月上旬頃の実施を予定しております。来年度も是非多くの関係者の方々にご参加いただき、より一層有意義で活発な情報交換会としたいと願っております。

国際交流促進部 増田 英隆

[ページトップへ](#)

TOEFLは、エデュケーショナル・テスト・サービス (ETS) の登録商標です。

日本から発信する英語

Dr. YUJI SUZUKI

慶應義塾大学 環境情報学部 鈴木 佑治 教授

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの鈴木佑治先生による、「ことば」に焦点をあてたコラムです。11回目は「思考の神経から学ぶ感覚運動などの基本的な精神活動」についてお話いただきました。

* SFCにおける鈴木研究室の取り組みは、[こちら](#)からご覧いただけます。



鈴木佑治 教授

1944年3月2日生まれ。

1966年、慶應義塾大学文学部英文科卒業。

1978年、ジョージタウン大学大学院博士課程修了。

Ph.D (言語学博士)。

専門分野は、言語学 (意味論、語用論)、英語学。

第11回目：

思考の神経から学ぶ感覚運動などの基本的な精神活動

目次

- ・ [神経学に関心を持つに至ったのは個人的体験から](#)
- ・ [体内の神経系ネットワークのコミュニケーションは対人コミュニケーションの基盤と原型](#)
- ・ [感覚や運動などの低次の精神機能は、思考や言語などの高次の精神機能の大切な基盤](#)
- ・ [失語症と思いきや急性の聴覚障害であった例](#)
- ・ [感覚、運動などにおける低次の基本的機能から学ぶもの](#)
- ・ [諸感覚と運動機能を健全に育成する大切さ](#)

神経学に関心を持つに至ったのは個人的体験から

最近読んだ本の中でとても面白かったのは、D. F. Benson著のThe Neurology of Thinking 『思考の神経心理学』(監訳：橋本篤孝)という本です。脳神経学の専門書ですから簡単に読める本ではありませんが、言語とコミュニケーションの基盤を考える上で大変勉強になりました。神経同士がコミュニケーション・ネットワークを作っており、コミュニケーションの原型を探ることができます。大学院の学生と一緒に邦訳で読みましたが、原書と併用で読んでみたら意外と読みやすいことが分かりました。

しかし、私が最初に神経学に関心を持ったのは、学問的興味からではなく個人的な事情によるものです。1995年の6月、小学校2年生であった私の次男が、突然不自然な歩き方をするようになりました。野球やサッカーをして元気で運動神経の良かった子が少し歩いては転んでしまうのです。7月になると状態は悪化し、原因を探る為に検査入院をしましたが分かりませんでした。脊髄の中に腫瘍ができて足の神経を圧迫するとそのような症状が起こるそうですが、その場合は通常、脊髄の腰の辺りに腫瘍ができるのだそうです。しかし、そのあたりを検査しても腫瘍は分かりませんでした。

私は医者バイブルである『メルク・マニュアル』という本を買い求め、必死に読んでみました。もしかすると腰よりも上の胸部あたりの脊髄の神経に異常があるのではないかと考え、その時にお世話になっていた慶應大学病院の整形外科の先生にそのことを話してみました。足だけに注意を払っていましたが、次男は右の胸部をもんだりしていたからです。そのような症例はあまり報告されていないとのことでしたが、念のために調べてみることになり、再度MRI検査をしました。すると胸部近くの脊髄に腫瘍が見つかったのです。「お父さん、わかりました。」という先生の声は、いまだにはっきりと覚えています。手術は同大学病院の整形外科の権威である戸山芳昭先生がしてください、腫瘍も良性であったことからみるうちに回復しました。3ヶ月後にはかけっこもできるようになり、徐々にもとの運動神経を回復するようになりました。それから9年経ち、現在は高校2年生で陸上競技部の400メートルと800メートルの選手として活躍しています。



しかし、手術前、手術中、手術後と親としては気が気ではなく、『メルク・マニュアル』を読み、いかにして神経が脳から感覚情報を受け、脊髄を通して手足の末梢神経に運動情報を伝えるか勉強しました。主治医の戸山先生は、素人の私にも分かるように手術と術後のリハビリについて図解をして懇切丁寧に教えてくださいました。先生が言われたとおり順調に回復し、今では先生が施された最先端の手術の痕跡が背中にかすかに残る程度です。先生の分かりやすい説明を受け、それ以来神経学に関心を持つようになりました。

【写真：筆者が読んだ医学関係の本の一部】

[ページトップへ](#)

体内の神経系ネットワークのコミュニケーションは対人コミュニケーションの基盤と原型



神経には、内臓や手足など末端の器官の隅々にいたる末梢神経系と、それらをコントロールする中枢神経系とがあります。正確に言うと、神経とは「神経細胞 (nerve cell)」のことで、別名を「ニューロン (neuron)」と言い、細胞のうちで神経機能を持つようになったものを指します。中枢神経系は脳と脊髄の神経系を含みますが、脳神経系があまりにも重要であるために脳神経が中枢神経を代表することがあり、脊髄の神経も中枢神経の一部であることを忘れがちです。末梢神経には、外界からの感覚情報を入力する感覚ニューロンと中枢神経からの命令を伝える運動ニューロンがあります。中枢神経は感覚ニューロンから送られてくる情報を処理しながら思考し、その結果を運動ニューロンにメッセージとして送り指令を出します。体の感覚器官に張り巡らされている末梢神経が情報を集めて中枢神経系にメッセージ

を送ると、中枢神経系はメッセージを解釈して新たなメッセージを作り、それを運動器官の末梢神経に伝えて運動を起こすのです。

【写真：ニューロンの図 Neuroscience(M. F. Bearその他著、Williams&Wilkin社)より】

すなわち、私たちの体内ではコミュニケーション活動が展開されているのです。コミュニケーションは発信者から受信者へメッセージを交換する行為です。発信者はまずメッセージを作らなければなりません。その為に様々な情報を集めて整理分析して思考し、概念構築してメッセージを作り、伝達媒体を介して相手に伝えます。メッセージを受けた側は、そのメッセージから相手の意思や意図を解釈して、それをもとに概念構築してメッセージを作り、相手に返答します。末梢神経がメッセージを送ると、中枢神経はメッセージを解して新たなメッセージを作り、末梢神経にそのメッセージを伝えて行動を起こさせています。末梢神経と中枢神経は発信者と受信者の役割を交互に演じているように見えます。

個人の体内では神経同士がこのようなコミュニケーションを展開し、そうした個人が複数集まって個体間の対人コミュニケーションを展開します。ある個人が発信者としてメッセージを送ると、また別の個人がメッセージを受信し、それを解釈して新しいメッセージを作り、相手に返します。発信者は受信者に、受信者は発信者というサイクルが繰り返されますが、同時にそれ

ぞれの個体の内部でも神経同士が発信・受信を繰り返しながらコミュニケーションのサイクルが回っているわけです。総合すると、コミュニケーションとは、個人の体内 個人対個人 個人の体内 個人対個人という一連のサイクルから構成されていると言ってよいでしょう。従って、コミュニケーション行為の重要な部分は個人の体内で行われており、その神経ネットワークはコミュニケーション・メカニズムの基盤であり原型であると考えてよいでしょう。特に思考を管轄する脳の中樞神経が演じる役割を抜いてコミュニケーションを語ることは出来ません。D. F. BensonのThe Neurology of Thinking 『思考の神経心理学』の研究にみる脳神経が思考を生み出す過程は、発信者によるメッセージの生成と受信者によるメッセージの解釈の過程に符合し、コミュニケーションを考える上で示唆を与えてくれます。発信者も受信者もそれぞれの「状況」に置かれており、発信者はその状況を認知し、概念形成してメッセージを組み立て、言語その他の様態のシンボルに変えて発信します。受信者も自分の置かれた「状況」の中で、発信者から送られてきたシンボルを受信し、コード解釈をしてメッセージの意味するところを取り出し、受信者のメッセージについて自分なりの概念に沿って再構築します。同時に、個々の体内ではそれに符合した精神的活動が展開されているはずで、発信であれ、受信であれ、末梢神経が感覚刺激を吸い上げ、中樞神経がそこから情報を取り出し、それを基に思考してメッセージを作り末梢器官に指令を出して反応させます。

[ページトップへ](#)

感覚や運動などの低次の精神機能は、思考や言語などの高次の精神機能の大切な基盤

脳神経では言語機能が局在するとみられている脳の左半球を「優位半球」と呼び、言語機能が無い右半球を「劣位半球」と呼んでいます。これまで、左半球の研究は盛んに行われてきましたが、右半球の研究はどちらかという軽視されてきました。Bensonは「言語の優位半球である左半球がメジャー半球であり、右半球はマイナー半球としてまるで左半球の『控え』のような取り扱いを受けてきた。」と厳しく批判しています。しかし、右半球には視覚心像、音楽、空間認識などの非言語機能があることが分かり、非言語コミュニケーションには重要な役割を演じていることが伺えます。左半球は言語など分析的な能力に長けており、右半球は芸術的な能力に長けているらしいと言われるように、右と左の両半球は協働してコミュニケーション活動をしているのです。

また、言語などの記号は「形」とその「意味内容」とが合体したものです。言語の形は左半球に局在しても、その意味内容は右半球に局在するかもしれません。たとえば、「日本の四季の美しさ」ということばの形である文法構造の分析は左半球が管轄しますが、それが意味する映像的かつ空間的心象は右半球で処理されているかもしれません。よって、言語の半分は右半球にも依存しており、両方の半球に分散し互いに協調しながら存在すると考える方が自然です。言語が左半球だけに局在するという考え方は、形に偏重した見方から来ているもので、



本来は言語の意味内容も含めて包括的に捉えて吟味すべきです。

左半球が言語などの高次の機能で能力の限界を超えたので、まだ余裕のある右半球にそれ以外の機能が根を張ったという考え方もあるようです。要は、言語の形態への偏重から言語形態を処理する左半球にのみ注目が集まり、視覚心像など言語の意味を考えるうえでとても重要な機能の研究が軽視され、それらの非言語機能が局在する右半球の研究も軽視されるに至ったようです。おかしな話です。右半球は音楽などの優位機能でもあり、たとえば詩などの韻律も解します。ということは、言語の抑揚など、言語の持つ非常に重要な詩的機能も右半球に負うところが多いということです。言語の意味体系だけではなく、音韻の体系を解明するのもとても重要であるはずで、

言語(形態)機能への偏重は左半球への偏重のみならず、言語などの高次機能への偏重につながり、あらゆる精神活動の基盤であるいわゆる低次の基本的な感覚、運動および制御機能の軽視につながる可能性があります。筆者の専門領域である言語学には、「言語習得」とか「言語心理学」という分野がありますが、言語の形態にのみ注意を払いすぎてそれを支える基本的な機能には注意を払っていません。幼児の口から言語が飛び出す以前から、基盤形成の活動が始まっています。言語習得はそうした基盤形成をも含めて考えた方がよいでしょう。というのは、言語機能障害の疑いがある症例を調べてみると、感覚や運動における低次の基本的機能の障害が言語能力に影響を与えて支障を来すケースが多々あるからです。

[ページトップへ](#)

失語症と思いきや急性の聴覚障害であった例



会話がなく「失語症」や「人格障害」を疑われた人が、調べてみると実は聴覚障害で、耳が突然聞こえなくなったために相手の話が分からず、会話が途絶えてイライラしていただけであったというケースが紹介されています。

ある日、アメリカの退役軍人一般病院に、64歳の男性が神経学診断テストを受けに送られてきました。その2年前、彼の行動に著しい変化が現れました。もともと人付き合いは好まないという性格でしたが、ある日突然コミュニケーションを断ち、快楽的行動に走って隣人を困らせるようになったのです。そこで、精神病院に入院して診てもらった結果、精神分裂症と判断されました。彼の行動はさらに攻撃的で否定的になり、病院のスタッフともコミュニケーションをとらなくなったそうです。投薬を受けながら入院生活を送りましたが、一向に良くなりませんでした。そこで、精神障害の病歴が無く症状が突如発生したということ踏まえて、精神的なものではなく器官的な障害ではないかということになり、神経学的診断を受けることになりました。

診断テストの間、患者の態度は否定的で質問に答えることを頑なに拒みましたが、時折、"Go away!" "Don't bother me." "What do you care?"等の意味ある言語反応をしました。ただし、それは突発的でその状況に応じて出てきたただけでした。結局、基本的神経学診断では異常はまったく認められなかったため、行動検査をしたところ、書き言葉であればその内容を理解し、反応することが分かりました。こうして、言語機能は障害を受けておらず、両側性の聴覚障害であることが発覚したのです。患者は言語および非言語（電話、ベル、手を叩く音、口笛など）の聴覚刺激を認識することはできませんでしたが、障害は末梢性ではなく、音は聞こえるといいました。例えば、歌を聞いても旋律は分からず、音楽としても捉えることは出来なかったのですが、手拍子を打つことが出来たのです。音を認識できなくても聞こえてはいるようでした。そこで、看護師に筆談でコミュニケーションをさせたところ、今までの否定的な態度は好転し、友好的になり楽しそうに振舞うようになりました。両側の脳梗塞により聴覚障害が生じ、皮質性聾と診断されたのです。筆談ができるということで言語障害ではないことと、雑音に反応はしたが認識できないことから末梢性ではなかったようですが、聴覚障害が高次の処理過程に影響を及ぼし、会話に支障を来した結果、対人コミュニケーションを避けるようになったのでした。（BensonのThe Neurology of Thinkingより）

[ページトップへ](#)

感覚、運動などにおける低次の基本的機能から学ぶもの

基本的機能にはいくつかありますが、紙面が限られているので、**感覚がどう処理されていくかについてBensonの解説を簡単にまとめてみます。**感覚には視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚がありますが、感覚情報は4つの段階の過程を経て処理され思考の一部として吸収されます。

第1段階では、感覚刺激は視覚なら網膜、聴覚なら蝸牛などの末端器官で「受容」されます。刺激は受容され伝達されますが、その間に修正され、再構築され、視覚なら視覚、聴覚なら聴覚に分けて範疇化され、大脳皮質の一次感覚野に送られます。ここまでが「受容」の過程です。それから「弁別」という第2段階の過程に送られます。ここでは送られてきた一連の感覚刺激を互いに比較して区別します。聴覚でいえば、それぞれの音の強さの比較などです。

弁別された感覚刺激は「単一樣態連合」という第3段階の過程に送られます。「様態」とは聴覚とか視覚とかを指しますが、この過程では、聴覚なら聴覚の弁別された刺激を記憶されている以前の刺激と比べます。結果、それぞれの感覚の非常に抽象化された表象が残ります。この段階は記憶の機能が関係し、抽象化される高次の段階です。そして単一樣態連合で処理された抽象的な表象は、第4段階の「異種様態連合」に送られ、ここで初めてそれぞれの感覚から送られてきた表象や、運動などの他の様態からの情報と関連づけられるのです。

Bensonは次の例を使って分かりやすく例証しています。「1.ベルが鳴る。刺激は聴覚器官で受容され、皮質に送られる。2.それからベルの音が他の音と弁別、区別される。3.以前の聴覚刺激と比較し関連づけをして表象を得る。4.表象は他の様態の情報と比較・関連付けをして意味ある情報にする。その結果、例えば、火事であることが分かり逃げる。」といった具合です。第3段階や第4段階の感覚処理過程はかなり抽象性が高く高次の過程であるのに対して、第1段階や第2段階は基本的で低次の処理過程であることが分かります。

前セクションで紹介した症例は、聴覚におけるこの第1段階の「受容」と第2段階の「弁別」の処理過程で障害が起き、そこで聴覚刺激が適切に処理されなかったために、第3、4段階の高次の処理過程に適切な情報が伝達されなかったことを物語っています。高次の感覚処理機能も言語機能も正常であったのに、聴覚の下部機能の障害で聴覚の情報だけが上部まで上がってこなかったというわけです。よって、視覚による筆談では何の問題もなくコミュニケーションが図れたのです。異種様態連合のところで聴覚だけを除いた他のコミュニケーション様態（ここでは視覚）を中心にコミュニケーションに必要な情報を得ることによって自分の意思を伝達できるようになったのです。

[ページトップへ](#)

諸感覚と運動機能を健全に育成する大切さ

上の症例から、「言語」「思考」そして「人格形成」という高次の機能は、感覚や運動の基本的な機能に依存していることが分かります。体制感覚の障害では、歯のかみ合わせによる痛覚が原因であることが分からずに、人格障害を起こして10数年も他人との接触を絶ち隠遁生活を送った女性が、かみ合わせを治したらとたんに良くなり、とても良い人になったという症例もあります。また、脳の出血などによって手足の運動機能に混乱が起こり、ことばで指示されなければ櫛で髪の毛をとかしたりできるのに、ことばで指示されると途端にできなくなるという症例もあります。ことばは普通に話せて理解もできるのに不思議です。これも基本的な運動機能の障害だそうですが、言語障害と錯覚される可能性があります。

私たちは、言語などの高次の能力がこうした基本的な感覚・運動などの機能に依存していることを忘れがちです。胎児は受精後4週間で神経管を完成させ、その神経管から5週目には中枢神経の原型を完成させるのだそうです。そして誕生した幼児は、まず手足耳鼻舌鼻目などの末梢感覚器官で外界の刺激を吸い上げ、たどたどしくも運動器官を動かしてコミュニケーションをします。コミュニケーションの基盤を一生懸命作っているのでしょう。ですから、子どもは外で思いきり遊ばせたほうがよいのです。ことばも覚えていきますが、他の様態の表現形態をうまく連動させながらコミュニケーションをしていきます。やがて学校で勉強する数学も外国語も生物も、そこから得られる知識は基本的な機能があってこそ学べるのです。

脳神経学をかじり始めた筆者は、高次の言語などの能力よりも、こうした基本的な能力に非常に興味を持ちました。次世代メディアによるテクノロジーは、視覚や聴覚や触覚などの末端感覚器官の延長として、かつては見たり聞いたり触れたりできなかったものをできるようにしました。また、私たちが自ら覚えなくとも機械に膨大な量の情報を記憶させることができるようになりました。

私たちの末梢神経と中枢神経は、今では体内から飛び出してグローバルに拡張されています。脳神経学もそのことを考えているのですが、筆者も、コミュニケーション論、言語論の立場から考えたいと思っています。どのような知的社会が構成されるのか想像してみたいのです。

以上、The Neurology of Thinking (Benson著)を中心に、『メルク・マニュアル』、平凡社の百科事典、その他、脳神経、意識に関する本を参考に、拙著『言語とコミュニケーションの諸相』（創英社三省堂書店）を重ねて考えてみました。

[ページトップへ](#)

TOEFLは、エデュケーションナル・テストング・サービス (ETS) の登録商標です。

連載: 言葉の玉手箱

Dr. Megumi Kawate -Mierzejewska

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊(ことだま)と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。

ご好評いただいている連載「言葉の玉手箱」では、Temple University Japan 大学附属英語研修課程 助教授 川手-ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説していただきます。言葉の世界の面白さをお楽しみください。

Dr. 川手 ミヤジェイエフスカ 恩 (めぐみ)



(Megumi Kawate-Mierzejewska, Ed.D, Temple University)

テンプル大学ジャパン 大学附属英語研修課程 助教授
2000年より、ETS公認コンサルタントを務める。

専門: 中間言語語用論(Interlanguage Pragmatics)

第14回目: ついでてしまう "I'm sorry."

今回は日本語で頻繁に使われる『すみません』という表現に焦点をあててみよう。

日本語で『感謝』と『謝罪』に使われるこの表現をそのまま英語になおすと "I'm sorry" ということになる。しかしながら、この英語での表現の使い方は日本語のそれとは異なり、「感謝」の意を表す時には使われない。更に、英語母語話者が "I'm sorry" を謝罪で使うときは自己の非を認めた時だけのものであるし、一説によると自己に非があっても勝者はこの表現を使う必要はないようだ。これにひきかえ、日本語での「すみません」はその場の状況を丸く収めたり、相手の顔をたてたりするというような理由で自己に非がなくても使われる。つまり、表面的な謝罪を通して『和』を作り出しているわけだ。このような方略的違いにより日本人英語話者による発言が誤解を招くことも往々にしてあるようだ。



まず、「感謝」の表現であるが、店から重そうな荷物を持って出てきた顔見知りの年配の教師に "Can I help you with your bags?" といったらその教師は "I'm sorry ..." といいながら荷物をもってもらったという話がある。その時、教師にしてみれば「すみません」と感謝の気持ちをあらわしていたに違いないのだが、まだ日本に来て間もない英語母語話者は「なぜ彼女はあやまるんだろう」と思ったという。また、北米からきたある英語教師は、勤務校のウェブマスターを仕事の一環としているのだが、日本人の教職員が英語でウェブに情報をのせてほしいと頼んでくる時はかならず英語で "I'm sorry

..."と最初に「謝罪」をしてくるというのだ。ウェブ担当の英語教師にしてみれば、なぜ日本人教職員はまず謝罪をしてくるのだらうと疑問に思っているらしい。かたや日本人英語話者にしてみれば日本語の「お忙しい中、お手数をおかけして申し訳ないんですが・・・。」というような表現をただ英語に移しているにちがいないわけだ。英語話者であれば"Thank you for your hard work. I wonder if you could post ..."というような具合に依頼をするに違いない。

さて、次に「謝罪」に関してであるが、相手の解釈の誤解や聞き違いから待ち合わせ場所に相手があらわれず、結局会うことができなくてそのままにしておくわけにもいかず後で電話をしたような時、日本人はことを丸く収めようとして自分に非がなくても"I'm sorry"とってしまう傾向があるようだが、北米人は自分に非がない限り"I'm sorry"とはいわないようだ。つまり、英語母語話者との会話で、日本人英語話者が日本的な感覚で"I'm sorry"と使ってしまうと、時と場合によっては誤解を招き、ない非をとがめられるようなことにもなりかねない。日本人にしてみれば"I'm sorry"というのは簡単で手っ取り早い解決法かもしれないのだが国際社会では通用しないかもしれないというわけだ。日本人英語話者はよほど意識して"I'm sorry"を使わないと適切に使えないのかもしれない。

おしまいに、マスコミやテレビで「すみません」が連発している日本社会をはたして日本語非母語話者がどう感じているのかは疑問である。

[ページトップへ](#)